

## 短 報

### 焼失した渾天儀の特徴\*

渡辺 誠・布村克志  
富山市科学文化センター

先に「日本国内に現存する渾天儀の特徴とその変遷」(渡辺・布村, 1991)を公表したが、その後、日本製の渾天儀の写真が新たに見つかったので、その特徴を先の発表を踏まえて考察する。

これは A Collection of Japanese Clocks (Mody, 1932) に収録されているものであり、戦火で焼失したと伝えられていて、現存しない。その意味で、前回の発表のリストに加えることはできない。

A Collection of Japanese Clocks には「黒地蒔絵渾天儀」とあり、黒漆塗りである。赤と銀で彩色された龍の絵が黒漆の脚4本に施されていて、金色で文字が書かれているとある。高さ13.5インチ、円周31インチとあり、直径は約25cmである。

写真から判断すると、三重輪。六合儀・赤道環・黄道環・白道環があり、極軸で回転する。直距はない。白道環は黄道環の夏至点と冬至点付近で回転するようになっている。天経環は六合儀、三辰儀共に雙環で、他は単環である。

文字は六合儀の天経環に「春秋分日道 去夏至日道二十四度」「冬至日道 去春秋分日道二十四度」とあり、冬至、春秋分における太陽南中高度を示している。地軸の傾きは二十四度としている。また、「南下去地三十一度」「南極入地下三十六度」とあり、北緯三十六度の地点であることがわかる。しかし、冬至点での高さが三十一度とあるので、360度の

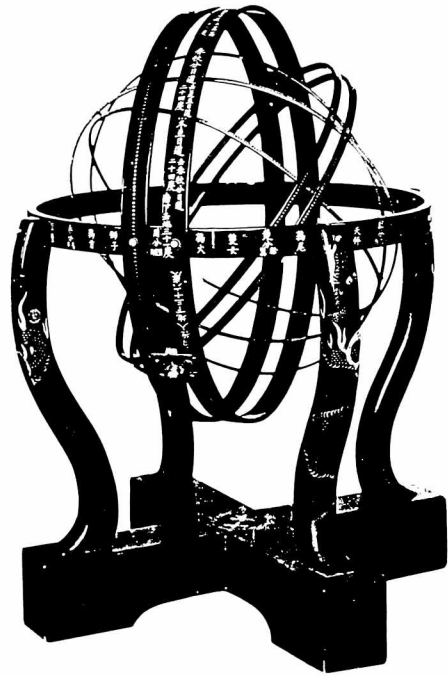


図1. 焼失した渾天儀 (A Collection of Japanese Clocks より)

分割では計算があわない。このことから、角度表現は365.25分割と推察される。このことから、360度の場合では地軸の傾きは23.7度、緯度は35.5度の地点である。

また、地平環に十二次、黄道十二宮が交互に、三十度ごとに二十八宿が描かれている。地平環に十二次を描いたのは城端町立中央公民館所蔵の渾天儀にあるが、黄道十二宮、二十八宿を描いたものは他の渾天儀には例がない。家相をみる際に二十八宿を方位として使用した例はあるが、黄道十二宮を方位にした例は少ないのではないと思われる。

直距はないが、白道環の回転軸を考えると、玉衡があったとは考えられず、月や太陽の動きを表した説明用の渾天儀、前回の発表では「新製渾天儀タイプ」に分類される。ただし、角度目盛が365.25分割を採用していることか

\*富山市科学文化センター研究業績第148号

ら、このタイプとしては古いものではないかと考察される。

#### 謝 辞

この渾天儀につきましては国立科学博物館の佐々木勝浩氏よりお知らせいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

#### 文 献

Mody, 1932. A Collection of Japanese Clocks. N.H.N.: plate120.

渡辺誠・布村克志, 1991. 日本国内に現存する渾天儀の特徴とその変遷. 富山市科学文化センター研究報告(14): 117-140.